

幼	ね	想	残	み	“		う	さ	自	し	親	る	た	だ	「	「	「	「	で
心	。	を	れ	を	人	「	と	れ	分	て	近	方	け	な	い	え	そ	れ	す
に		生	る	補	間	当	息	る	の	。	感	だ	ど	と	。	。	。	。	か
信		む	よ	い	”	たり	を	の	口		が	と	、	。					ら
頼		引	う	合	と	前	潜	は	を		湧	思	女	。					嬉
し		き	に	う	い	や	め	な	出		き	っ	将	。					し
て		金	な	よ	う	完	た	い	た		。	。	さ	。					い
い		に	っ	う	う	壁	言	か	言		。	。	。	。					ん
た		な	。	に	動	、	葉	と	葉		。	。	。	。					で
大		っ	。	進	物	全	の	。	の		。	。	。	。					す
人		て	。	化	が	知	不		不		。	。	。	。					け
か		る	。	し	作	能	安		安		。	。	。	。					ど
ら		こ	。	た	り	な	定		定		。	。	。	。					。
言		と	。	も	出	ん	さ		さ		。	。	。	。					
わ		は	。	の	し	て	に		に		。	。	。	。					
れ		事	。	だ	た	。	何		何		。	。	。	。					
て		実	。	け	た	。	か		か		。	。	。	。					
い		だ	。	が	た	。	を		を		。	。	。	。					
る		け	。	生	た	。	指		指		。	。	。	。					
よ		ど	。	き	た	。	摘		摘		。	。	。	。					

雨は初めてですか？」	だと怖くなりますよね。雨ノさんもここでの	「雨ノさんわかりました。これだけ強い雨	旨を伝えた。	いう感情に疑問が混ざり、とりあえず承知の	なぜそれを自分に言っているのか、嬉しいと	「そうですか。」	の、部屋にい・行きます。」	あの、こ・今晚わたし、美祿ちゃんの、そ	「あつ、よ、よかった・です。すいません	「はい。いますよ。」	本来の自分を照らしてくれた。	ていたが、雫の声と存在が光源となり明瞭な	言い知れぬ不安の霧が五感全てを朧にし始め	名前を呼ばれ番才は再び暗闇へと戻って来た	やいますか？」	「あつ、あの！ば・番才様、いらっし	た。	番才の発した声は、獣の唸り声に掻き消され	「なぜ、自分を傷つけるのか。」
------------	----------------------	---------------------	--------	----------------------	----------------------	----------	---------------	---------------------	---------------------	------------	----------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------	-------------------	----	----------------------	-----------------

す	ば	て	「	掌	す		え	番	「	い	れ	な	る		つ	ガ	「	自
か	、	答	同	で	ね		て	才	雨	い	、	く	意		け	タ	え	分
？	少	え	じ	顔	。		い	が	ノ	理	わ	て	味		る	ガ	っ	を
」	し	る	質	を			た	ゆ	さ	由	か	、	が		雨	タ	。	傷
	は	こ	問	覆			っ	っ	ん	を	ら	わ			が	と		つ
	は	と	を	つ			た	く	。	、	な	か			部	窓		け
	相	が	さ	た			ま	り		、	く	く			屋	を	の	
	手	で	れ	ま			ま	と		つ	。	な			か	揺	だ	
	の	き	て	ま			、	襖		欲	い	っ			ら	す	と	
	こ	ま	も	ま			、	を		し	っ				遠	る	思	
	と	せ	、	、			、	開		く	。				の	風	い	
	を	ん	わ	頭			、	け		。	。				い	が	っ	
	理	。	た	を			、	る		。	。				っ	一	。	
	解	同	し	左			、	と		。	。				瞬	瞬	。	
	で	じ	は	右			、	、		。	。				収	収	。	
	可	状	自	に			、	微		。	。				まり	まり	。	
	思	況	信	な			、	か		。	。				、	、	。	
	い	に	を	れ			、	に		。	。				打	打	。	
	ま	な	持	。			、	聞		。	。				ち	ち	。	
	す	な	っ				、	こ		。	。							
	か	。	。				、	こ		。	。							
	？						、	こ		。	。							
	」						、	こ		。	。							

番才の眩きも雫の耳には届かなかつた。

「ああああ、あのっ！」

「はい。」

「・・・い、行ってらっしゃい。」

「はい。行ってきます。」

〜
続
く
〜